

シンポジウム「十四世紀の宗教文芸—『梅林折花集』『真友抄』の世界—」

全体趣旨文

オーガナイザー 芳澤 元 (明星大学)

近年、日本文学・歴史学・仏教学・美術史などの諸分野を往還する学際的研究の試みは旺盛になされる機会が増えた。他方、諸分野から警鐘が鳴らされているように、研究の個別分散化が指摘され、各資料に関する専門的な知識や技術を、他分野と共有することを難しくしていることも事実である。しかし、現在「史料学の時代」にあるとされる中世史研究や、聖教・典籍調査を機に寺院史研究とも接続した中世文学研究を見るに、仏教資料の活用は、狭義の宗教史を超えて、隣接分野を架橋する突破口になりうるものと考えられる。

その鍵として注目される仏教資料が、南北朝期の醍醐寺僧賢西と高山寺僧某の問答記録である新出史料『梅林折花集』(醍醐寺蔵)である。本企画は、『梅林折花集』の詞章分析および時代的社会的背景の分析を通じて、説話文学の持つ宗教文化世界の解明を目指すものである。本資料は同時代の記録に比べ、内乱・災害・習俗・説話・絵巻など隣接分野の関心を惹く多彩な内容を有する。しかも、賢西は本資料とは別に、問答聞書『真友抄』を著わしている。実は、『梅林折花集』と『真友抄』とは、時期的にも内容的にも連続するものである可能性が高く、鎌倉末期以降に著わされる重要文献の所見や、『太平記』の叙述とも関わる内容が多く確認できるのである。

このように両資料から検出される豊富な情報から、南北朝内乱に揺れる14世紀の文学—社会—宗教がおりなす時代像を多角的に捉えることが、本企画の狙いである。

本企画はシンポジウム形式で行う。まず、芳澤元報告は、『梅林折花集』の概要や『真友抄』との関係をふまえ、その史料世界の背後に広がる時代情勢を論じる。つぎに、高橋慎一郎報告は、『梅林折花集』『真友抄』の著者賢西を取り上げ、彼の拠点だった上醍醐丈六堂という場の特質を浮き彫りにする。また、猪瀬千尋報告は、『梅林折花集』における口承性・書承性の問題や、高山寺を中心とした周辺環境の問題、作品における思想性の問題について論じる

本企画を通して、隣接分野と成果を積極的に共有し、説話文学研究の幅を広げる学際的研究の場としたい。

南北朝内乱の騒擾と寺院社会—醍醐寺賢西『梅林折花集』と『真友抄』—

芳澤 元 (明星大学)

本報告でとりあげる未刊史料『梅林折花集』(醍醐寺蔵)は、南北朝期の醍醐寺僧賢西が高山寺僧某と交わした問答の記録である。筆者の賢西は、本史料とは別に、同様の問答聞書『真友抄』も著わしている。『真友抄』は既に中山一麿氏によって翻刻・紹介されているものの、発表媒体の市販性が乏しいこともあってか、学界での認知度は決して高いとはいえない。

じつは、『梅林折花集』と『真友抄』は、時期的にも内容的にも連続するものである可能性が高い。『真友抄』が延文二年(一三五七)九月二十八日から康安二年(一三六二)二月三日までの問答を筆録するのに対して、『梅林折花集』は康安二年二月三日(残り分)から同年十月二十八日までの問答を収めている。後者はおよそ九か月という短期間に集中する記録だが、前者の続編として著述されたものと思しい。『梅林折花集』と『真友抄』は切り離せるものではなく、両書を併せて分析する必要がある。

両書を著わした賢西は、上醍醐丈六堂を拠点に活動したが、史料中には正平一統とその瓦解にいたる京都の騒擾、南海大地震、麻疹の流行など、当時の戦乱と災害にも敏感に反応している。その話題は『太平記』にも通じているが、両書は問答した年月日が明記されている点に、史料価値と特徴を有す

る。

そうしたなかで賢西は、『夢中問答』や『撰撰本願念仏集』『七天狗絵』などの書物や絵巻を読み、禅宗や浄土宗の動向を警戒している。彼の態度は、法然を批判した明恵（『摧邪輪』）や、夢窓疎石と論争を繰り広げた東寺杲宝（『開心抄』）などと共に、禅宗や念仏の台頭に対する顕密仏教側の言論として見逃せず、当時の時代相をよく示している。

一方、本書からは、明恵没後に再興された高山寺に遊学した都鄙の僧侶や唐人と接触した形跡がみえる。両書を著述した賢西の知識は、高山寺僧との問答という単線的なものではなく、多彩な寺院間交流のなかで育まれたものであり、『太平記』の世界を解明する上でも必読の史料となるに違いない。

賢西と上醍醐丈六堂

高橋 慎一郎（東京大学史料編纂所）

『梅林折花集』・『真友抄』の著者である賢西は、南北朝期に活躍した真言僧で、『梅林折花集』奥書などによれば、「丈六堂僧都」と称されていた。醍醐寺聖教の奥書などから、この丈六堂とは、上醍醐寂静院谷の丈六堂のことと思われる。また、同じく醍醐寺聖教の奥書からは、賢西が上醍醐宝幢院の文海法印から金剛王院流の法流を受けたと推定される。以上より、賢西は、醍醐寺のなかでも特に上醍醐を拠点にして活動していたことがわかる。

鎌倉末期から南北朝期にかけての上醍醐は、座主房である三宝院や理性院などの門跡院家、金堂・五重塔などの主要伽藍が存在する下醍醐とは異なって、より遁世的な雰囲気にも包まれた空間であった。貴種僧がほとんど居住していないかわりに、律や華嚴、浄土などの教えを学び、修学に打ち込むような相対的に出自階層が低いと思われる僧たちが活動の拠点としていた。泉涌寺系の律を学びつつ金剛王院流の聖教の書写・集積に務めた、秀源という僧などは、その一例である。

以上より、上醍醐は、多様な教学の交流と、知識の集積が行われる場であったと言える。こうした環境を背景に、賢西の修学活動と『梅林折花集』の生成が展開したのである。

『梅林折花集』の文芸と環境

猪瀬 千尋（名古屋大学研究員）

『梅林折花集』について、①言談としての性質の問題、②作品と周辺環境の問題、③言談における思想性の問題の三点から考察する。

①言談としての性質の問題について、『梅林折花集』が口承性の強い説話だけでなく、書承性の強い説話が含まれている点を指摘する。前者の例として覚園寺道照房にまつわる滑稽譚を挙げ、後者の例として壹和僧都の熱田社参詣の話を挙げる（この説話は『春日権現験記絵』とも関わるものである）。

②作品と周辺環境の問題について、筆録者・賢西が閲覧したという阿字観についての絵巻物を取りあげ、国宝絵巻「阿字義」と覚鑿上人との関連からこれを考察する。また高山寺本堂の前に明恵が植えたという桜があり、そのもとで『十无尽院舍利講式』に基づく花供が行われていたという『梅林折花集』の記述を踏まえ、言談内に登場する舍利についても考察する。合わせて言談内に登場する高山寺内の堂宇についてもまとめる。

③言談における思想性について、逆縁（仏を誹る縁によって、仏と結縁するという考え方）を巡る師匠と賢西の問答や、禅宗や念仏に対する賢西の捉え方を読みとくことから、行法だけではない、種々の宗派が混交する中での真言僧としての生活と思想が、『梅林折花集』から垣間見えることを指摘する。